

2023年7月 診療カレンダー

日	月	火	水	木	金	土
2	3	4	5	6	7	1/8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31	1	2	3	4	5

住所: 東京都中央区日本橋大伝馬町13-8
 メディカルプライム日本橋小伝馬町3階
 TEL: 03-3639-3110 FAX: 03-3639-3112

熱中症に
注意してください!

サインージ
はじめました

18時最終受付

ホームページ
院長ブログ公開中

2023年8月 診療カレンダー

日	月	火	水	木	金	土
30	31	1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31	1	2

「今月の言葉」
 「見たいと思う人には、いつでも花はあります」
 There are always flowers
 for those who want to see them.
 ~ アンリ・マティス ~

お知らせ
 ・発熱、風邪症状の方はお電話で予約受診してください

The Path to Color 色彩への道

一般診療	月	火	水	木	金	土	日
10:00-13:00	●	●	●	●	●	●	×
15:30-19:00	×	●	●	●	●	×	×

●9:00-12:30

展示会には多くの彫刻・デッサンもありましたが、これらは絵画の制作にあたり、自分の考えを整理するために制作されたものだと思います。マティスの作品が試行錯誤を経て作られていることをうかがい知ることができました。

マティスの絵画で最も魅力的だと感じたのは1940年代のヴァンスでの作品でしょう。このころのはっきりとした色彩とくに赤の使い方は印象的で、彼にとっての傑作期といってよいでしょう。実は1940年代はマティスは大病をして、手術で一命を取りとめたものの体調が優れない日が多かったようです。ベッドや車いすで過ごす日々が多い中、紙にはさみをいれりと直ちに形が湧き出る「切り絵」にのめり込んでいきます。一見子供の切り絵にも見えるこの作品は「ジャズ」という作品集として出版され、切り絵は晩年の傑作であるロザリオ礼拝堂のスタンドグラスや上祭服のマケット(ひな形)として重要な役割を演ずることになるのです。

ヴァンスのロザリオ礼拝堂は80代のマティスが設計、装飾、什器、祭服などすべてを制作したまさに畢生の大作です。展示会では車いすに座ったマティスが長い竿を使いながら壁に絵を描いている写真もあり、まさに老体に鞭打って作品に取り組んでいることが分かります。売店で買い求めた図録のなかには、自分のアトリエでも同じように長い竿を使って下絵を描いている写真も収められており、一見即興で描かれているような絵が実は緻密な計算のもとに描かれていることが分かります。

これまでマティスの作品をみると、芸術家が感性で描いた作品だと思っていたのですが、実は彼は色彩、線、光の具合、構図など科学者のように綿密な実験を繰り返しながら作品を仕上げていたことが分かります。また、生涯にわたって作品を発表し続け、作品は進化し続け、最晩年にも傑作を生みだした彼の努力と作品への情熱はすさまじいものがあります。

展示会の後にはグッズコーナーがありましたが、マティス関連のグッズは大変人気があり多くの人でごった返していました。マティスはロザリオ礼拝堂を作る際には「訪れる人々の心が軽くなるような」場を作ることを念頭に設計したそうです。確かにマティスの絵には見ているこちらが元気をもらえるような作品が多かったように思います。ひょっとするとそれが人気の秘密なのかもしれません。

マティス展は8月20日まで東京都美術館で開かれていますので、お時間のあるかたはぜひお出かけください。

7月に入り蒸し暑い日が続きますが皆さま、いかがお過ごしですか。熱中症にはくれぐれもご注意ください。

以前もお話したことがあります、当クリニック、入って左奥の壁には黒いフレームに入った写真が飾られています。この写真はクリニック開院にあたり、建物写真家である私の知人が貸してくださいましたものです。その方は建築写真、なかでもヨーロッパの教会が専門で、当院の作品はアンリ・マティスが晩年に手がけた南フランスにあるロザリオ礼拝堂の祭壇を写したものです。スタンドグラスを通して光が祭壇に映りこみ、幻想的な色彩を織りなすこの作品を私は大変気に入っています。皆さまも是非じっくりとご覧ください。

先日、東京都美術館で開催中のアンリ・マティスの展示会「The Path to Color 色彩への道」へ行ってきました。今回の展示会ではマティスの世界最大規模のコレクションを誇るパリのポンピドゥーセンターから、絵画・彫刻・デッサン・版画・切り絵そしてロザリオ礼拝堂に関する資料など大変多くの作品が展示されておりました。

マティスは1869年にパリの北にあるル・カトー＝カンブレジというところで生まれ、1954年に84歳で亡くなりました。1869年生まれというところがちょうど私の生まれた100年前ということになります。マティスは当初は法律家を目指して法律の学位を得て代訴人見習いの職についたのですが、21歳の時にたまたま病氣療養中に「暇つぶし」として母から絵の具セットを贈られたことをきっかけに絵を描き始め、その後デッサンの勉強にはげみ、モローのアトリエに入り画家として活動していくようになります。

マティスが最初に注目を浴びたのはフォービズムと呼ばれた絵画運動でしょう。フォービズムとは原色を多用した強烈な色彩と、激しいタッチを見た批評家が「あたかも野獣(フォーヴ, fauves)の檻の中にいるようだ」と評したことから命名されました。今回の展示会でも初期の作品は荒々しいタッチと大胆な色使いが印象的でした。マティスのこの時期の作品は一定の評価を得ていたようですが、マティスのフォービズムの時代は数年で終わりを告げ、その後は実験的、かつ平面的な表現へと変化していきます。